

教養について

筑波大学文芸部に贈る

大学生に欠かせないもの。それは「栄養」「休養」「教養」である。これを合わせて三養と言う（言わない、筆者だけが使う言葉である）このうち、栄養と休養は生物学的価値が高く、誰もが（一部の者は非常に不完全ながらも）摂取しているようであるが、教養は無くても生きていられる（むしろ生きやすい）ためにその摂り方を知らぬ者が多い。その現実を大変嘆かわしく思い筆（キーボードだが）を執った次第である。（重々しく書いてみたが、ここに書くことのほとんどは半ば冗談である気楽に読んでもらいたい）

文芸部

筑波大学文芸部の芸という文字に注目してもらいたい。ここで言う文芸が文学を意味するのであれば藝という字を使うべきであった。藝は教養を意味する。例えば古代中国、支配階級（士の身分）に必要な六つの教養として「六藝」というものがあつた（内容は礼・楽・射・御・書・数）。もともとこの藝には植物を種からまいて大切に守り育て後世にこれを伝えるという深い深い意味があつた。さらにここから、人の心に種をまき大切に守り育て後世にこれを伝えるというありがたい意味も加わり、藝術や教養の意味にも使われるようになり今に至るはずであつた。ところが1946年政府によって制定された当用漢字というものによって、藝という字は執の部分を取られてしまった。つまり、「大切に守り育て」の部分がなくなってしまったのである。そんな魂の抜けた藝の字を使っていて良いのか。

しかし、悲観することはない筑波大学文芸部の芸の字にも我々にふさわしいすばらしい意味があるのである。藝の略字として芸が作られる以前から芸という字は別な意味で存在していた。（つまり、1946年に政府の人間は芸という字がすでに他の意味で存在していることに気がつかなかつたのである。）芸の意味は「ヘンルーダ」という草、英語ではルーと呼ぶ草であるが、この草には強い香りがありそれが書物につく虫を払う効果をもっていたため書物の保管、書庫に関して使われるようになった。

例は日本最古の図書館である石上宅嗣の「芸亭」（図書館情報専門学群の学生はどこかで学ぶはずである）、故宮の書庫「芸閣」などが挙げられるであろう。図書館情報大学から始まり例年古本市を行う文芸部の活動にふさわしい字ではないか。

自由七学藝

中国では六藝であったが、ヨーロッパでは古代ギリシャから古代ローマを過ぎ中世までの長きにわたり教養といえは「自由七学藝」（the seven liberal arts）であった。その中身についての詩がある。

Gram loquitur;	文法は人に語り、
dia vera docet;	論理は示す真理、
rhet verba colorat;	修辞は言葉の飾、
Mus canit;	音楽は歌の囀り、
ars numerat;	算術は数を知り、
ge ponderat;	幾何は地を測り、
ast colit astra.	天文は宇宙の光。

この詩に示されている通り、「自由七学藝」は文学的三科目、文法、修辞法、弁証法と数学的四科目、算術、幾何、天文、音楽（音楽は数学科目である、本学で数学を教える平賀譲教授の専門が音楽情報科学であるのは実にこの所が原因ではあるまいか）で構成されている。なお、この自由七学藝の上には専門科目が四つある。哲学、神学、法学、医学である。そして、これらの学問の間にあるのが図書館情報学を含む学際領域なのである。